



Title	Scale Structures and Event Measurement
Author(s)	田中, 英理
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47085
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	田 中 英 理
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 0 7 9 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	Scale Structures and Event Measurement (スケール構造と事象の測度)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大庭 幸男 (副査) 教 授 金水 敏 助教授 岡田 禎之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、英語および日本語におけるアスペクト合成現象について考察している。本論文でいうアスペクトとは、動詞が示す事象の内部構造に関わる時間概念である。Vendler (1957/1967) の分類に従えば、そのアスペクトは状態 (States)、活動 (Activities)、達成 (Accomplishments)、到達 (Achievements) に分けることができる。さらに、これらは、(i) 下位区間 (subinterval) の含意を持つかどうか、(ii) 未完成相パラドックスを示すかどうか、(iii) in/for X のどちらの時間副詞と共に共起するか、という特性によって限界的 (telic) なものと非限界的 (atelic) なものとに区分することができる。この分類によれば、状態と活動は非限界的であり、達成と到達は限界的である。本論文では、非限界的である活動を表す動詞が、限界的になる現象をアスペクト合成現象と呼び、こうしたアスペクトの合成がなぜ可能になるのかを論じている。本論文は英語で書かれたもので、全 5 章から構成されており、総頁数は A 4 判 vi+257 頁である。

まず第 1 章では、アスペクト合成現象の先行研究を概観し、その問題点を指摘する。第 2 章では、この現象を説明するための事象意味論 (event semantics)、部分理論 (mereology)、および Schwarzschild (2002) の測量理論等を概説する。そして、非限界事象と不可算、限界事象と可算の平行性を押し進め、非限界事象から限界事象への合成は、不可算から可算への変換と同様に「測量」という関数によって捉えられると提案する。ここで重要なことは、測量関数が単調性の制約を守らなければならないことである。第 3 章では、第 2 章で示した提案の妥当性を検証している。まず、移動動詞構文におけるマデ句と二句の分布について記述し、マデ句は二句と異なり必ず経路項を必要とすると主張する。さらに、日本語の遊離数量詞構文との統語的分布の類似点より、マデ句が VP 副詞として機能していると仮定する。経路項は、准同型 (homomorphism) 関数によって関連付けられるので、マデ句に含まれる単調な測量関数が事象を測量することができ、これによって限界事象へのアスペクト合成が可能となる。さらに、第 4 章では英語の結果構文を取り上げ、このようなアスペクト合成が単調な測量関数による事象の測量によって生じるという仮説の正当性を検証する。結果構文には、直接目的語の制約という統語的な制約が存在するが、それを捉えるために、BECOME を主要部とする結果句を形成する小節に類似した構造を仮定する。またこの構文には、結果述語として生じる形容詞句・前置詞句が閉じたスケール構造を持つという意味的な制約がある。そこで、BECOME の意味を notP から P への遷移の区間をとるとし、この幅と主節事象とが准同型になることから、これが事象の測度として機能する

と主張する。したがって、結果述語が閉じたスケール構造をもつ場合にのみ BECOME の遷移の区間が単調性を示すので、結果構文にはこの種の述語が生じることになる。第5章は結語である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、非限界事象が限界事象に変わるアスペクト合成現象について議論している。この現象を引き起こす言語表現は、前置詞句、後置詞句、数量表現、結果構文における結果述語など多岐に渡る。本論文の基本的なアイデアは、**He walked. He hammered the metal.**などの非限界事象が **He walked to the station. He hammered the metal flat.**のように **to the station, flat** が付加されると限界事象に変わるのは、**water, paper** などの不可算名詞が **two glasses of water, a piece of paper** のように **two glasses of, a piece of** が付加されると可算名詞に変わるのと同様に、「測量」によるものである、ということである。本論文ではこのアイデアを理論的に議論するために、事象意味論、部分理論、及び Schwarzschild (2002) の測量理論等を導入している。その結果、アスペクト合成現象を事象の測量という概念によって統一的に説明するとともに、これに関連する言語表現の意味や文法性を適切に記述している。

本論文の評価すべき点は、①事象の測量としてマデ句や *to* 句の特徴を捉えることによってこれまで指摘されていなかった現象を説明したことや②結果構文に特有の意味的制約を事象の測量に関わる一般的制約として捉えたことである。

本論文は、問題点の所在を明確にし、それを解決するための議論を明快で論理的な方法で展開しながら独創的な提案を行っている。全体として形式意味論の強みを生かした意欲的な論文として高く評価できる。

以上のような本論文の優れた成果にもかかわらず、問題点がまったくないわけではない。まず、アスペクト合成現象を構造と意味の両面から解明しようと試みているが、本論文で示されている結果構文の構造は、意味関数を主要部とする意味範疇とでも呼ぶべきものを含んでいる。統語構造は、通常、統語範疇のみによって構築されるので、部分的な修正が必要であろう。また、第3章と4章では本論文の提案が移動動詞構文や結果構文の意味を適切に算出できることを示しているが、従来の提案ではどのような意味が算出されるかについて充分には議論されていない。従来の提案と比較して、本論文の分析にどれ程大きな利点があるかを示すことが望まれる。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。